

## 【研究課題】

# 遠隔期川崎病死亡例の臨床病理学的検討

研究期間：2013年4月1日～2020年3月31日

川崎病の報告から50年が経過し、成人期に達した川崎病既往者は10万人を超え、5,000人以上の川崎病既往成人例が突然死の危険性を有する動脈瘤を残しながら日常生活を送っていると推測される。川崎病における血管炎後遺病変が粥状動脈硬化症の危険因子になることも危惧されており、川崎病冠動脈後遺症の病態解明と突然死の予防は、差し迫った課題である。これまで、研究分担者らは若干の川崎病遠隔期死亡例について解析し、動脈瘤が残存する場合、瘤前後で狭窄性病変が生じやすく、粥状動脈硬化症が一般の症例よりもより高度であると指摘してきた。しかし、突然死例は、一般病理解剖では殆ど経験がなく、小数例の解析に止まり、不明な点が多かった。今回、川崎病17例の突然死について検討することができた。その結果、①左冠状動脈には拡張動脈瘤が、右冠状動脈には血栓閉塞後再疎通瘤が好発した。②冠状動脈硬化症に関し、その多くは初期病変(11/17例、65%)で、進行性病変は少数であった。③進行性動脈硬化性病変の大部分(6/9枝、67%)は拡張動脈瘤部に観察された。④血栓性閉塞はほぼ全て拡張動脈瘤部に生じるが、進行した動脈硬化性病変は38%(5/13枝)、残る動脈枝には軽度の粥状動脈硬化症が観察された。⑤再疎通瘤における粥状動脈硬化症は軽度で、新たな血栓性閉塞像もなかった。⑥瘤非形成動脈の大多数(18/21枝、86%)は初期病変であった。今後も症例数を増やし、川崎病の冠状動脈瘤が、新たな狭窄性病変へと進行するのか、急性冠閉塞をきたすのか、粥状動脈硬化症を促進する危険因子となるのか、解析が必要である。突然死例の検討は、川崎病研究にとって極めて大切な意味があり、新たな研究を計画している。